阿波國 すきま漫遊記

― 関東からの転入者による徳島再発見 ―
VOL.13 下浦の釈迦堂

釈迦堂

毎年、桜の季節になると思い出す仏像がある。石井町浦庄の釈迦堂に安置されている釈迦如来座像だ。釈迦堂は、旧伊予街道に面した目立たないお堂で、現在は町内の集会所として使われているため、ぱっと見にはお寺には見えない。この集会所内に大仏があることは、石井町民でもあまり知らないのではないだろうか。

国道 192 号線を走ると、所々で伊予街道の旧道へと入るY字路に出会う。私はこんな道を見ると、つい旧道に入ってしまう。名所旧跡などはたいていは街道に沿って点在しているからだ。旧道走行はすきま観光の基本と言えるだろう。

私が初めて釈迦堂を訪れたのは桜が満開の季節だった。釈迦堂の前は道が特に狭くなっていて、車の運転に集中しなければならない場所だ。満開の桜がなければここにお堂があることに気付かなかっただろう。

釈迦堂には山門や墓地もなく、見た目は寺らしくない。住職もいないため普段はカギがかかっていて、大仏はサッシュ越しに見るだけだ。4月上旬の日曜日に近所の人々が花見会をするので、そのときだけ境内が華やかに飾られる。

浦庄大仏

「大仏」とは、実際の仏陀の体のサイズよりも大きく作られている仏像のことをいう。仏陀は超人的な存在で、身長は四・八mあったとされている。したがって、立ち姿の仏像の場合は四・八mを超えれば大仏ということになる。座った仏像の場合は、半分が基準となっていて二・四mが境界線だ。釈迦堂の釈迦如来座像は全高がちょうど二・四mなので大仏に分類できるのである。「浦庄大仏」と呼んでもいいかもしれない。

石井町指定文化財の案内板を見ると、頭部のみが鎌倉時代、体は室町時代、腕は江戸時代の修復だという。

この大仏の特徴は何といっても、集会所の中にあるということにつきる。県内には徳島市の丈六寺をはじめ、立派な大仏がいくつかある。それらの寺では大仏は人を導く威厳に満ちた存在だ。ところが浦庄大仏は、少しも威厳ぶったところがない。顔立ちは大きさのわりにぼんやりしていて、まどろむような曖昧な表情を浮かべている。この不思議な大仏の誕生には次のような言い伝えがある。

全体的に塗りが剥げていたり、衣紋の表現などもいかにも後世の作りで、仏像としてのキレはない。だがこの大仏の良さは、キレではなくて身近さではないだろうか。お寺を出て、人々の暮らしの中に下った仏さま、そんな存在だ。

建物の内部はほとんどの部分が集会所の機能なのだが、中央の１間だけが仏間になっていて、大仏はそこに窮屈そうに納まっている。
集会室にはカラオケセットも見える。大仏の横でカラオケを歌える場所は全国でもここだけかも。

伝説

その昔、いまの釈迦堂の南側に薬師寺という大きなお寺があり、浦庄大仏はその本尊だったというのだ。その仏像を作ったのは奈良時代の名僧、行基だった。行基が国分寺を建てる場所を探して全国を行脚したとき、浦庄に立ち寄って本尊を彫ったのだという。薬師寺はその後、何百年が経ってすたれていたが、鎌倉時代に再び復興して堂塔が整った。

そして世は戦国乱の時代となり、土佐の長宗我部元親が阿波に攻め入る。吉野川の流域では激しい戦いが繰り広げられた。多くの寺が焼き打ちされ、薬師寺も例外ではなかった。本堂に火の手が廻ったとき、僧たちはせめて本尊だけでも守ろうと、寺の裏手の淵に本尊を投げ込んだ。

長宗我部の軍勢が去ったあと、村人たちは淵から大仏を出そうとしたが、寺の裏は斜面が急だったため、対岸に引き上げざるをえなかった。そしてそのまま伊予街道に面した場所にお堂を建てて安置することになった。

ところがこの大仏は霊験が強すぎたために、街道を通る人々に困った問題が起きるようになった。大仏が不浄を嫌ったため、魚屋が生魚を担いでお堂の前を通ると転ばされたり、農家が大八車に肥桶を載せて通るとひっくり返されたりするのだった。また、侍が馬に乗ったまま通ると、落馬するというありさまだった。いくらありがたい大仏でも、これでは街道を安心して通れない。仕方なく偉いお坊さんに頼んで、大仏から魂を抜いてもらった。そのせいで大仏は庵主の一人も養えないようになり、いまのように落ちぶれてしまったのだという。

たまたま訪れたときに堂が開いていて、上がらせてもらった。堂内には昔の百万遍念仏の大数珠が残っていて、昔の様子を再現してくれた。このあたりでは百万遍は小学生の行事で、一人が中に入ってカネを叩き、残りの子は周りで大数珠を回した。

釈迦堂の南を流れる曲突谷川。大仏を投げ込んだ淵があったというあたりの様子。左側の斜面の上が昔の寺があった場所。今の釈迦堂は右側になる。今は三面コンクリートの排水路だが、昔は子供が泳いだり、ウナギを捕ったりできる川だったそうだ。

釈迦堂から南へ行く道は光明小路と呼ばれる古道だ。
浦庄小学校の横の灌頂橋では昔タヌキが人を化かしたという。葬送行列がここを通ると、担いだお棺が急に軽くなるといわれ、絶対に通らなかった。今では想像もできない。

かつて薬師寺の伽藍があったとされるあたりには大銀杏があり往時をしのばせる。
長宗我部氏は多くの寺を焼いたので浦庄では良くは言わない。阿波の者が土佐の菩提寺に行くと墓に小便をかけるため、長宗我部氏の墓には柵があるのだなどともいう。

深草　縁夫　関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。 ■日本すきま漫遊記　http://www.sukima.com